⑧秦　敬一／モラエスと八雲　　憧憬から追慕へ

一　モラエスは、1854年にポルトガルに生まれた。一方のハーン（小泉八雲）は、1850年のギリシャ生まれ。モラエスは1889年4月4日の8月に初来日し、ハーンが日本にその最初の一歩を印したのは1890んsん4月4日で、ほぼ同時期である。日本で生活した年数は、ハーンの14年に対してモラエスは三十年以上と長い。ただし、ハーンが日本を愛し、日本人を妻にし、家庭を築き、旧制松江中学や東京帝国大学で教鞭をとるなど、多くの知識階級との交流があったに対して、モラエスは、領事という立場にあったが、市井にひっそりと暮らしたという感が深い。また、同時代を生きたが、二人に面識はない。あくまでもモラエスにとって、ハーンは文明批評と異国情緒にあふれた作品を書く、範とすべき人物だったのである。モラエスの著作を読むと、あちらこあちらにハーンの名を見ることができる。たとえば、神戸時代の著作「日本通信」IIの第19章、1904年10月26日の日付があるが、その記事の中でモラエスは、「ラフカディオ・ハーンの死」と題して、＜小泉は、明らかに青年時代の難渋生活の無理がたたったのだろう。弱い肉体組織はかなり以前から病気にかかっていたので、雅趣がある庭に囲まれた東京の住居に引きこもっていた。交際嫌いで神経質で偏屈な気質で、最近では、東京に住む多くの外国人とのどんな交際も絶対に拒んでいた。9月26日の朝、少し庭園を散歩した後、突然、死んだ。埋葬は仏式で行なわれた。＞と、ハーンの晩年とその最期について述べた後、ハーンの業績についても言及し、＜小泉八雲もは、入籍した新しい祖国を崇拝していたし、その著述でも日本を崇拝し続けている物が多い。すばらしい叡智、随想的で微細な藝術家気質、美しい形式で日本に関する著書を書き、ひどく日本的な随想を出版したが、そのすべたがすばらしい文学の宝玉であった＞（「定本モラエス全集・花野富藏訳」と賛辞を贈っている。

また、晩年の「おヨネとコハル」の中でも、ハーンの著作にすいて、＜それらはすべて、形式、優艶な言葉づかい、精妙な観察、鋭い感覚という点ですばらしいものであり、彼だけがもつある種のえもいわれぬ情緒性によって英国の、そして間違いなく世界文学の中で第一級の現代散文家のひとりと今日、考えられる権利—長いあいだ認められず、やっと得たのであるがーを彼に与えている＞（「おヨネとコハル」・岡村多希子訳）と述べている。モラエスは生前のハーンには憧れを持ち、また死後は、追慕という形で常に意識の片隅にあったように思われる。

モラエスはハーンの模写であり、模倣であるという意見もある。たしかにその作品の中には、ハーンの影響も少なくない。対象への接近の仕方やものの味方、捉え方にハーンに通じるものが多いのも確かである。日本の近代をどう見るかといった時に、モラエスはハーンと同様に、より肯定的に見ようとしている。たとえば、彼が最後の著作としてまとめた「日本精神」などは、パーシヴァル・ローレルの「極東の魂」に構成や取り上げる項目が酷似しているが、日本人の国民性や日本文化についての評価は、否定的なローエルと全く正反対の結論に至る。

モラエスは、けっして独創的な日本研究をしたとは言えないし、優秀なジャパノロジストではなかったかもしれない。しかし、彼は彼自身の生き方を通して、異文化理解というものを体現した。それはハーンとはまた違った意味で、深く、重いものであった。その体験は、私小説的な随筆として異国に生きるエトランゼの孤独感と哀しみが的確な筆致で描かれる「徳島の盆踊り」や「おヨネとコハル」となって結実する。

二　ヴェンセスラウ・ジョゼ・ソーザ・モラエスとと小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）。この二つの名前にはそれぞれの生涯が象徴されているように思う。ギリシャに生まれ、自らのアイデンティティを探し求め、遠く東洋の島国でその生涯を終わったハーンは、日本に帰化し、小泉八雲を名乗った。それに対して、大航海時代の覇者ポルトガルのリスボンに生まれ育ったモラエスは、終世モラエスのまま、誇り高きルシタニアの民としてその後半生を日本に送ったのである。（モラエス会）

\*ルシタニア…ポルトガルの古名、雅称。